

建築の倫理を探る！ 工学院大学名誉教授・ 宮澤健二

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■ 建築の勉強

工学院大学は、帝国大学の初代総長らが「工手学校」として開設した学校である。現場を支える職工の育成を目標にした、日本で最も古い私立の工業の実業学校が前身だ。

1943年生まれで宮澤健二さんは工学院大学と同大学院で学んだ。そして、2011年に教授退官まで後進の育成にかけてきた工学博士であり、一級建築士資格を有するプロフェッサー・アーキテクト。故郷の新潟県十日町が織物の町であったことや、東京電力で技術者だった父の影響を受けて、エンジニアの世界に入るきっかけになっているのかもしれない。その程度が建築への出発であったという。

松井源吾先生の弟子にあたる望月旬教授のゼミに入った。成績のよかった宮澤さんに唯一、「可」を付けたのが望月教授に対して「やってやろうじゃないか」の気持ちがムクムク湧いてきたからだ。助手になってシェルの研究も手伝うほどの師弟関係になるとは知るよしもなかった。生田勉都市計画事務所の桐生文化会館や天竜市立中央公民館、盛岡市立武道館の構造設計は実績の中のいくつかである。

宮澤さんが現役時代から研究熱心であるのは、慶應義塾大学法学部の通信課程で学士を取っていることからわかる。教授でありながら、他大学で勉強するのは余程の思いがあったのか。実は、建築の訴訟問題の相談を受けることがあって、「勉強しなければならない！」と実感していたのだ。慶應大学通信課程は四人に一人しか学位が取れない。難関を突破すると、経歴に出身の所属を記載しなくていい。が、宮澤さんはそれではフェアではないからと、常に明らかにしているそうだ。「木造住宅の建築設計監理における建築士責任に関する考察」という、倫理に直結した興味深い論文が誕生したのです。

■ 覇志堂と今の木造傾倒を語る

海外へは長期、短期、研修、家族との旅を含めて36回行ったという。16回がアメリカだが、望月教授との1974年発表の論文がきっかけだった。次女がシカゴに留学したことや、アメリカ人と結婚したプライベートな出来事も後押しした。

常に、「技術者倫理的考察」的な視点で建築を見るから、アメリカでの事例にも自然に目がいく。80階建のビルの外壁が、大理石では危険と提示した工学部の学生の指摘から設計者と施工者が危険を認めて全面直した事件や、タコマ橋の落下に対しての倫理的検討は一読の価値がある。

宮澤さんと覇志堂とが、現在の木造をある意味で憂う会話は示唆に富んでいる。

「中大規模木造はどうも力技になっているのではと疑問に思うのですが？」(覇志堂)「おっしゃる通り。木造と言うが肝心のところに鉄やコンクリートを使い、耐火技術が主のようで、これでいいのかなと感じています。」(宮澤)。「普及を急ぎすぎているともいえますね。」(覇)。「それを心配しています。新しい構法確立には時間がかかります。木造化推進には、日本の気候と耐久性を含めてもう少し研究する必要があるよう思います。」(宮)。

これからもアメリカ通いは続くだろうと、宮澤さんに笑顔が戻る。アメフトに興じるビクナ孫君と会う目的もあるし、宮澤名誉教授の建築の倫理的なアメリカ建築観察は途切れないはずなのです。若い頃から変わらないらしい風貌に秘めた建築への想いは少しも衰えない。世界遺産の5%に当たる場所を訪ねたという程の旅行好きは、セсна機の操縦までして皆を驚かせる強者でもあるのです。

